

平成24年度病害虫発生予報第4号(7月予報)

今月のトピックス

カンシャシクイハマキ(さとうきび)

学名 : *Tetramoera schistaceana*



カンシャシクイハマキ成虫



カンシャシクイハマキ幼虫

幼虫の区別



イネヨトウ



カンシャシクイハマキ

生態と被害

沖縄では年6～7世代を重ね、周年発生する。1雌当たりの生涯産卵数は200～500卵に達する。ふ化幼虫は、さとうきび葉鞘の内側を下降して節部の芽や根帯から食入し、生長点を加害し芯枯れを起こす。

さとうきびにおいて、メイチュウ類とは一般的に本種とイネヨトウの2種を指す。カンシャシクイハマキの体色は淡黄色で背中に規則的な斑紋がある。一方イネヨトウの体色は紫がかっており、斑紋はみられない。カンシャシクイハマキは卵を葉の付け根に1～数卵ずつ産み付けるため、圃場内での芯枯茎の分布は集中しない。

<http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/cateview.jsp?cateid=119>

平成24年6月28日
沖縄県病害虫防除技術センター

I 7月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	40	30	40
平 年 並	40	30	30
低い(少ない)	20	40	30

(平成24年6月22日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

地点別の平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	28.9	31.8	26.8	141.1	238.8
宮古群島(宮古島)	28.7	31.6	26.6	130.8	246.7
八重山群島(石垣島)	29.5	32.0	27.6	130.4	264.5

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 7月の発生予報概要

作 物	病 害 虫 名	発 生 量		
		沖縄群島	宮古群島	八重山群島
さとうきび	カンシャシンクイハマキ	多	並	並
へちま	ヒメクロウリハムシ	多	—	—
にがうり(施設)	ミナミキイロアザミウマ	やや多	—	—
オクラ	うどんこ病	—	—	やや多
	フタテンミドリヒメヨコバイ	並	—	—

III その他注意すべき病害虫等

※本文中では○(白丸)にて表記

作 物	病 害 虫 名	対 象 地 域		
		沖縄群島	宮古群島	八重山群島
水稻(二期作)	もみ枯細菌病			○
	スクミリンゴガイ			○
さとうきび	イネヨトウ	○	○	○
	アオドウガネ		○	
	イナゴ類		○	○
温州みかん	そうか病	○		
	ミカンハダニ	○		
マンゴー	細菌性病害		○	○
	チャノキイロアザミウマ	○	○	○

☆ 予報の見方 ☆

「発生程度」は平年との比較を示しています。そのため、毎年その月で高い数値が続いた場合には、その月の「発生程度」は密度が高くても「並」として発表されます。前月との多少の比較はグラフを参考にして下さい。

◇ 一般的な病害虫防除対策について ◇

- a 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- b 薬剤抵抗性害虫や薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布に努める。
- c 薬剤散布の際は、近隣作物へのドリフト(飛散)に注意する。
- d 防除効果を高めるため、むらのないよう丁寧に散布する。
- e 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- f 多湿にならないよう、圃場の排水をよくする。
- g 病原菌は雨水や風で伝搬されるので、ビニールの破れ等を補修する。

平成24年度沖縄群島病害虫発生予報第4号(7月予報)

I 7月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	40	30	40
平 年 並	40	30	30
低い(少ない)	20	40	30

(平成24年6月22日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	28.9	31.8	26.8	141.1	238.8

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 7月の発生予報および防除上の注意事項

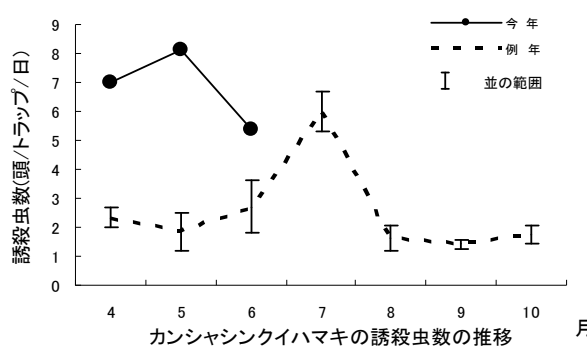
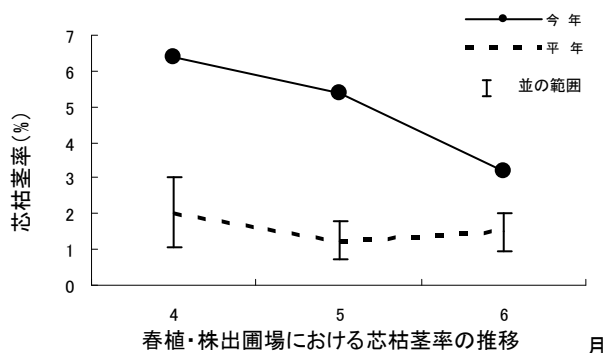
1 さとうきび

(1) カンシャシクイハマキ

発生程度 : 多

予報の根拠

- a 6月下旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は3.2%(前年4.2%、平年1.5%)と平年より高かった。
- b 6月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は5.4頭(前年0.8頭、平年2.7頭)と例年より多かった。

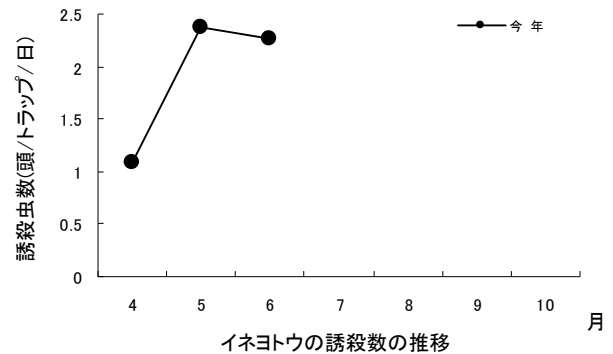
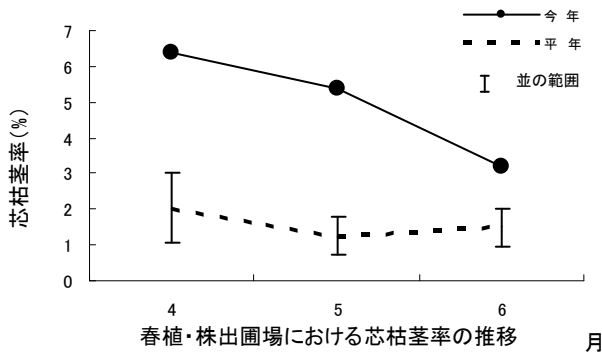


<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- e 平成24年度病害虫発生予察技術情報第1号参照(平成24年4月5日付)。

○ イネヨトウの防除対策

- a 6月下旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は3.2%(前年4.2%、平年1.5%)と平年より高かった。
- b 6月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は2.3頭であった。
- c 与那国島において、イネヨトウの被害が多発した際の誘殺虫数は2頭以上であった。



<防除上注意すべき事項>

カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。

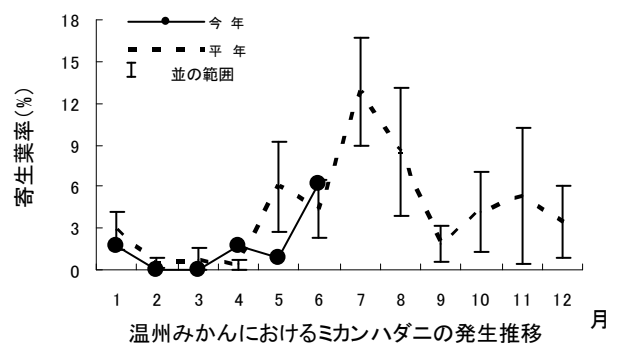
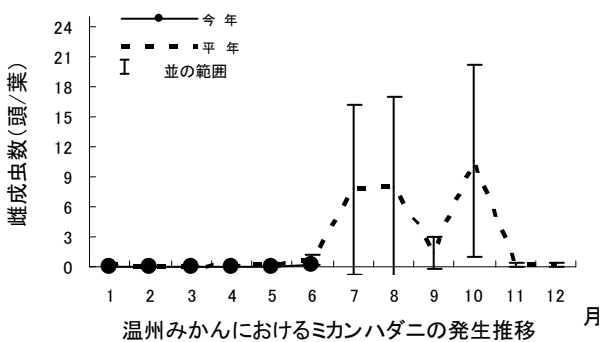
2 温州みかん

○ そうか病の防除対策

- a 6月下旬の調査の結果、発病果率は4.4%(前年8.8%、平年6.8%)と平年並であった。また、一部の園地で発生が多くみられた。
- b 病害虫防除員からの報告によると、6月の発生程度は中であつた。
- c 摘果作業時に、発病果の除去に努める。
- d 発生がみられる園地では、薬剤による防除を徹底する。

○ ミカンハダニの防除対策

- a 6月下旬の調査の結果、葉あたり雌成虫数は0.1頭(前年1.5頭、平年0.7頭)と平年よりやや少なく、寄生葉率は6.2%(平年4.4%)であつた。また、一部の園地で発生がみられた。
- b 本種は夏～秋にかけて発生が多くなることから、薬剤による防除を徹底する。



3 マンゴー

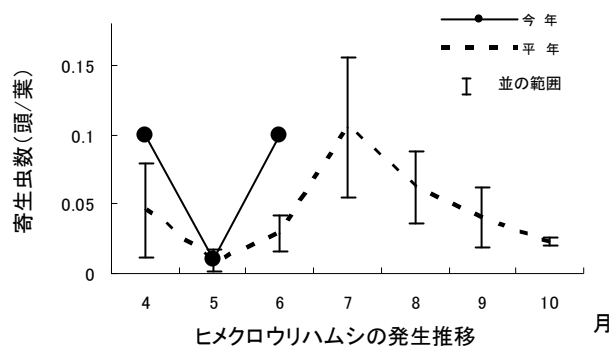
○ チャノキイロアザミウマの防除対策

- a 6月下旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.9頭(前年0.4頭、平年3.1頭)で平年並であった。また、一部の園地で発生が多くみられた。
- b 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除する。
- c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。

4 へちま

- (1) ヒメクロウリハムシ
発生程度 : 多
予報の根拠

6月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭(前年0.1頭未満、平年0.1頭未満)と平年より多かった。



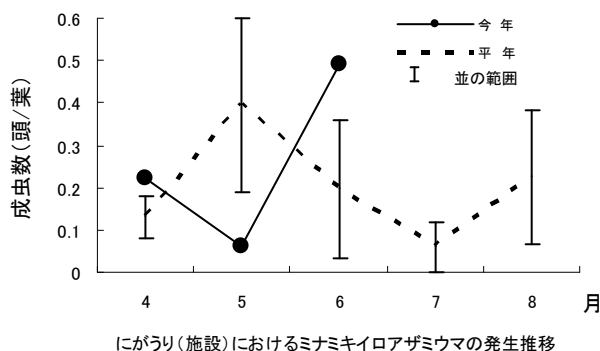
<防除上注意すべき事項>

- シルバーテープなど光反射資材を利用し、成虫の飛来防止に努める。
- 圃場内外のウリ科雑草は発生源になることから、根も含めて除去する。
- 産卵防止のため、地際部をシートなどで覆う。

5 にながうり(施設)

- (1) ミナミキイロアザミウマ
発生程度 : やや多
予報の根拠

6月下旬の調査結果、葉当たり成虫数が0.49頭(平年0.20頭、前年0.11頭)と平年よりやや多かった。



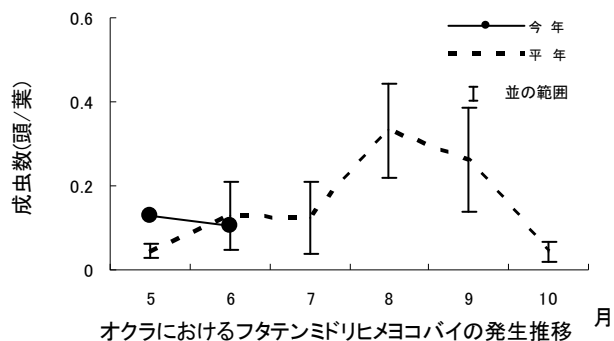
<防除上注意すべき事項>

- 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
- 施設の出入口、天窓、側窓にはネット資材等を張り成虫の飛来侵入を防ぐ。
- 摘心や摘葉後の残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。

6 オクラ

- (1) フタテンミドリヒメヨコバイ
発生程度 : 並
予報の根拠

6月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭(前年0.1頭、平年0.1頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 多発すると吸汁加害により葉の萎縮や黄化が進み生長が阻害されるため、葉裏をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。
- 発生源となる圃場周辺の雑草を除去する。

平成24年度宮古群島病害虫発生予報第4号(7月予報)

I 7月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	40	30	40
平年並	40	30	30
低い(少ない)	20	40	30

(平成24年6月22日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
宮古群島(宮古島)	28.7	31.6	26.6	130.8	246.7

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 7月の発生予報および防除上の注意事項

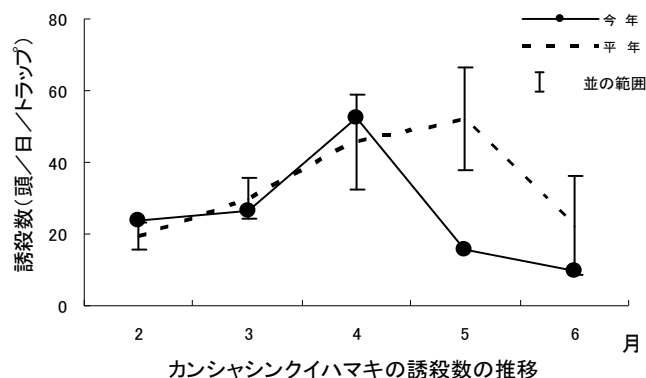
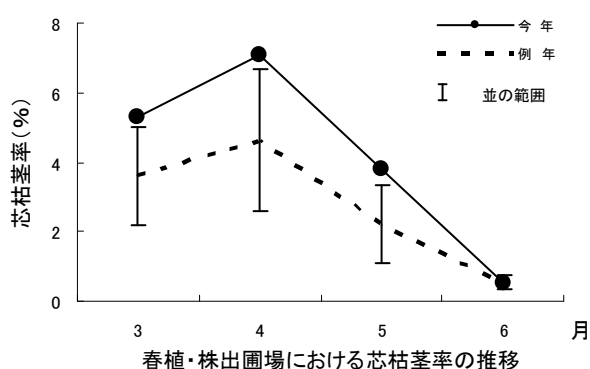
1 さとうきび

(1) カンシャシクイハマキ

発生程度 : 並

予報の根拠

- a 6月中旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は0.6%(前年0.4%、例年0.5%)と例年並であった。
- b 6月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は9.9頭(前年15.6頭、平年22.4頭)と平年よりやや少なかった。

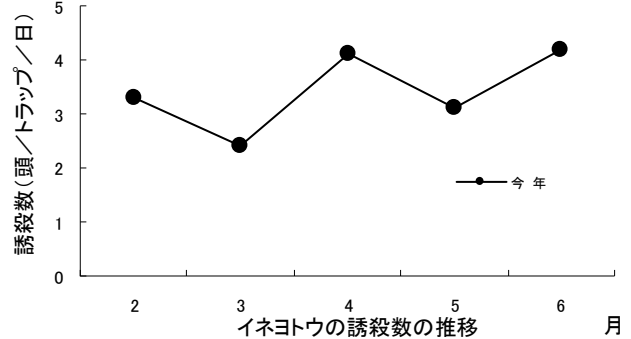
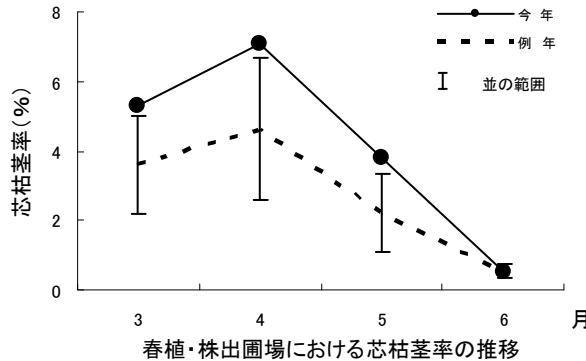


<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- d 平成24年度病害虫発生予察技術情報第1号参照(平成24年4月5日付)。

○ イネヨトウの防除対策

- a 6月中旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は0.6%(前年0.4%、例年0.5%)と例年並であった。
- b 6月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は4.2頭であった。
- c 与那国島において、イネヨトウの被害が多発した際の誘殺虫数は2頭以上であった。

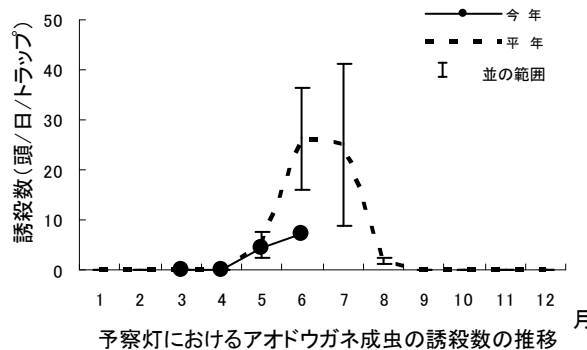


<防除上注意すべき事項>

カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。

○ アオドウガネの防除対策

- a 6月の予察灯への日当たり誘殺成虫数は、7.3頭(前年14.5頭、平年26.3頭)と平年よりやや少なかった。
- b 5～7月は成虫の発生時期にあたるので、誘殺灯の保全・管理を徹底する。
- c 7月は幼虫の防除適期(1～2齢期)にあたるので、例年被害の多い地域では防除適期を逸しないように薬剤を施用する。



○ イナゴ類の防除対策

- a 6月中旬の調査の結果、一部圃場でイナゴ類(ヒゲマダライナゴ、タイワンツチイナゴ)による葉の食害がみられた。また、周辺雑草で幼虫の多発生がみられた。
- b 気象予報によると、向こう1か月の気温の高い確率、降水量の少ない確率がともに40%と予想されており、イナゴ類の発生を助長すると考えられる。
- c 発生源となる圃場及び周辺の除草を徹底する。
- d タイワンツチイナゴは4齢以降にさとうきびの葉を加害するようになるので、発生圃場では早期に薬剤防除を行う。
- e 平成24年度病害虫発生予察技術情報第2号参照(平成24年度4月27日付)。

2 マンゴー

- 細菌性病害の防除対策
 - a 折損等の傷から菌が侵入し発病することから防風対策を図る。
 - b 罹病した部位は速やかに施設外に持ち出し、焼却等の処分を行う。
 - c 罹病枝を剪定した後の剪定器具の消毒を徹底する。

- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - a 6月下旬の調査の結果、一部圃場で多発生がみられた。
 - b 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除する。
 - c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。

平成24年度八重山群島病害虫発生予報第4号(7月予報)

I 7月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	40	30	40
平 年 並	40	30	30
低い(少ない)	20	40	30

(平成24年6月22日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
八重山群島(石垣島)	29.5	32.0	27.6	130.4	264.5

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 7月の発生予報および防除上の注意事項

1 水稻(二期作)

- 二期作におけるもみ枯細菌病の防除対策
 - a 例年、もみ枯細菌病は二期作に多くみられる。
 - b 6月中旬の調査の結果、一部本田(一期作)で本病の発生がみられた。
 - c 本病は種子伝染するので、発病田から採取した籾は種籾として使用しない。
 - d 塩水選により不稔籾を除去するとともに、種子消毒を徹底する。
 - e 育苗期の高温多湿を避けるため、育苗施設の換気を十分に行う。
 - f 生育不揃いもしくは腐敗している苗は罹病している可能性があるので本田に持ち込まない。

- 休閑期におけるスクミリンゴガイの防除対策
 - a 例年、スクミリンゴガイの被害は二期作に多く見られるため、休閑期の防除が重要である。
 - b 貝および卵塊は見つけ次第捕殺する。なお捕獲するときにはゴム手袋を着用する。
 - c 貝の破碎のために耕耘深度は浅くし、土の硬い時期に通常の半分の速度で耕耘すると効果的である。
 - d 取水口に金網(5mm以下)を設置し、用排水路からの侵入を防ぐ。
 - e 畦畔および用排水路周辺の雑草を除去し、産卵場所をつくらない。
 - f 一期作において発生が著しかった地域では、生産部会等で一斉防除する。

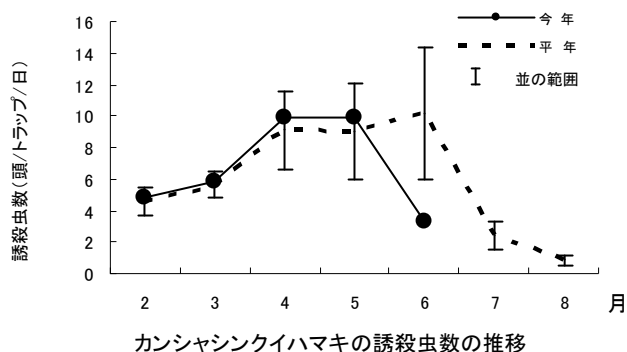
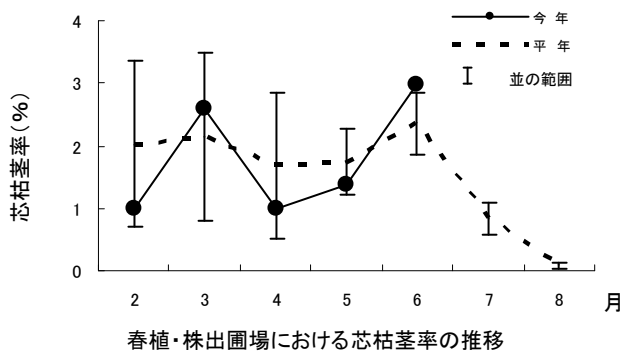
2 さとうきび

(1) カンシャシクイハマキ

発生程度：並

a 6月下旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は3.0%(前年2.4%、平年2.4%)と平年よりやや高かった。

b 6月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は3.4頭(前年3.6頭、平年10.2頭)と平年よりやや少なかった。



<防除上注意すべき事項>

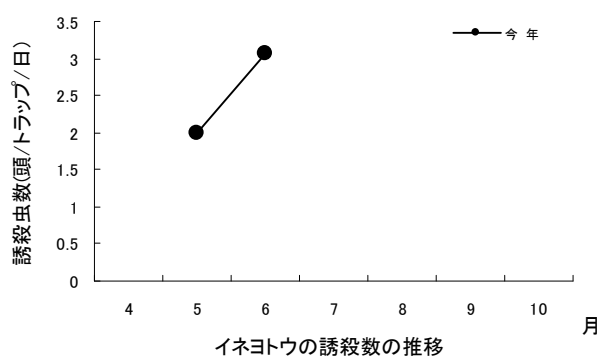
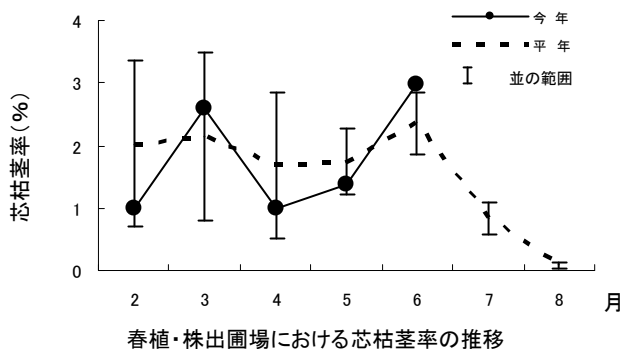
- ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- 平成24年度病害虫発生予察技術情報第1号参照(平成24年4月5日付)。

○ イネヨウの防除対策

a 6月下旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は3.0%(前年2.4%、平年2.4%)と平年よりやや高かった。

b 6月のイネヨウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は3.1頭であった。

c 与那国島において、イネヨウの被害が多発した際の誘殺虫数は2頭以上であった。



<防除上注意すべき事項>

カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。

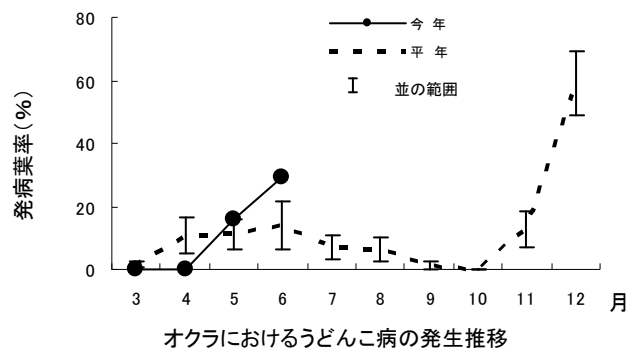
- イナゴ類の防除対策
 - a 6月中旬の調査の結果、与那国島の圃場でイナゴ類(ヒゲマダライナゴ、タイワンツチイナゴ)による葉の食害がみられた。また、周辺雑草で幼虫の多発生がみられた。
 - b 気象予報によると、向こう1か月の気温の高い確率、降水量の少ない確率がともに40%と予想されており、イナゴ類の発生を助長すると考えられる。
 - c 発生源となる圃場及び周辺の除草を徹底する。
 - d タイワンツチイナゴは4齢以降にさとうきびの葉を加害するようになるので、発生圃場では早期に薬剤防除を行う。
 - e 平成24年度病害虫発生予察技術情報第2号参照(平成24年度4月27日付)。

3 マンゴー

- 細菌性病害(枝枯細菌病)の防除対策
 - a 折損等の傷から菌が侵入し発病することから防風対策を図る。
 - b 罹病した部位は速やかに施設外に持ち出し、焼却等の処分を行う。
 - c 罹病枝を剪定した後の剪定器具の消毒を徹底する。
- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - a 6月下旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.1頭未満(前年1.4頭、平年2.3頭)と平年よりやや少なかった。
 - b 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除する。
 - c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。

4 オクラ

- (1) うどんこ病
 - 発生程度 : やや多
 - 6月下旬の調査の結果、発病葉率は29.0%(前年1.0%、平年14.0%)と平年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分し、透光通風を良くする。